

最近話題となっている病害虫

徳島県病害虫防除所 主任 兼田 武典

ビワキジラミ

学名：*Cacopsylla biwa* Inoue

英名：Loquat psyllid

2012年5月、徳島県内の露地ビワほ場において、すす病の被害が認められ、茎葉にはキジラミ類と思われる幼虫および成虫が多数寄生していた。そこで、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構の井上広光主任研究員に同定を依頼したところ、リンゴキジラミ属(*Cacopsylla*)の未記載種であることが判明し(2014年には学名「*Cacopsylla biwa*」として新種記載され(Inoue *et al.*, 2014))、同年7月、本県病害虫防除所は本種に対し病害虫発生予察特殊報を发出了。その後、2016年9月には香川県、2017年6月には兵庫県、さらに、2018年4月には和歌山県から特殊報が发出されており、他地域での発生も認められた。

形態・生態：成虫は、葉裏の葉脈に沿って定位し吸汁することが多く、体長2.5～3.8mmで♀がやや大きい。刺激をすると強力な後ろ足を使い飛び跳ね飛翔する。春夏期には黄土色の体色、秋冬期には赤みがかった暗褐色の体色を呈する(図1)。発生は5～6月に最も多く、次いで10～4月であり、8～9月には少なくなるが、多化性と考えられている。一方、幼虫も、成虫と同様の時期で密度増減があり、発生が認められる時期には、新芽や果房の隙間や果実同士が接した部分などに寄生する。体色は若齢時には黄色～淡黄白色であるが、齢を重ねるごとに褐色味が増す(図2)。卵は黄色で2～3月と9～10月に新梢や花房の基部に産下されることが多い。



図1 ビワの葉裏に定位する成虫(春夏期)



図2 ビワの花房に寄生する幼虫

寄主・被害：これまでに寄生が確認されている植物は、ビワのみである。被害としては、成虫・幼虫の排泄物である甘露によりすす病の発生が誘発され、果実が汚染される(図3)。



図3 ビワ果実におけるすす病の発生

防除：現在、本種に適用のある農薬として、ジノテフラン水溶剤、ジノテフラン液剤及びトラロメトリン水和剤が登録されており、対策としては薬剤防除が主となっているが、生態等に不明な点が多いことから、更なる研究により確実な防除対策の確立が望まれる。このため、2017年度より農研機構果樹茶業研究部門が中心となり本種の防除対策の確立等に関する研究事業「新害虫ビワキジラミの防除対策の確立」が実施されている。

参考文献：

Inoue, H., T. Nakanishi, T. Kaneda. (2014) *Cacopsylla biwa* sp. nov. (Hemiptera: Psyllidae): a new pest of loquat *Eriobotrya japonica* (Rosaceae) in Japan. *Appl. Entomol. Zool.* 49: 11-18.